

石炭とのかかわり : わが半生の記録

長弘, 雄次
九州共立大学

<https://doi.org/10.15017/13760>

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 15, pp.207-212, 1991-12-25. 九州大学石炭研究資料センター
バージョン :
権利関係 :

石炭とのかかわり

—— わが半生の記録 ——

長 弘 雄 次

一、はじめに

昨今北海道の北炭幌内炭鉱の閉山、九州の三井三池炭鉱の大幅縮小合理化と、石炭産業の暗いニュースがあい続けている。日本の石炭産業は遂にここまで来たのか、我が国の石炭産業は遠からず壊滅するのではないかと我が身を振り返ってつくづくと感じる此の頃である。

昭和二十二年学窓を出て、石炭産業にマイニングエンジニアとして身を投じ、戦後の敗戦復興のための石炭増産の時代、そして二十年後半から三十年代にかけて、石油を主体としたエネルギー革命のなか、石炭産業の存続をかけて機械化・合理化に明け暮れた時代、諸外国の安い石炭の輸入と共に、劣悪な自然条件の坑内掘りの日本の石炭産業は抗すべくもなく、主として筑豊の炭鉱はつきつきと閉山を余儀なくされ、その間九州、北海道の炭鉱と閉山の度に転出をくり返し、四十年代は閉山した筑豊の炭鉱の残務処理としての鉱害復興の業務に約十年、昭和五十五年にその仕事から離れるまで三十年余、我が半生を過した石炭産業とのかかわりをほろ苦い思いで振り返るのみである。

今我が国の石炭産業が、消え去らんとする存亡の時を迎え、明治・大

正・昭和三代、日本経済の近代化に果たした役割、一〇〇年の石炭産業を見直し、後世に伝えてゆくことも石炭産業に従事した体験者としての義務かとも思うものである。

我々が石炭産業に職を奉じたとき、日本の石炭はあと百数十年は続けられると言われ、そのことは無限な気持さえ抱いて、その仕事に誇りさえ持っていた。そしてわずか数十年後に、消え去ろうとしている。今は石油が全盛時代である。しかしこれも数十年後は枯渇化に向うと言っ

昨今、食糧としての米の自由化論争が賑やかである。国の基本となるエネルギー、食糧政策が政争の具にされ、我が国の将来を危まらせることにならないか。もっともっと冷静に国家百年の計を策定し、世界的規模のもとその対策を論ずべきであろう。

それが故に我が国のエネルギー政策に翻弄され、今日に至った石炭産業の記録を後世に残すことも有意義と考えるものである。

以下我が半生の記録として、石炭の盛衰の一片をとりまとめた。

さきに「我が石炭産業に従事した頃——炭掘りし日々の記録——」をとりまとめたが、今回は情緒的な面から記述したい。

二、石炭とのかかわりはじめ

私が石炭とかかわりはじめたのは何時頃であつたらうか。筑豊地区に生れ育つた人々にとっては、小さいときから朝な夕なに硬山（ボタヤマ）を眺め、石炭列車の運行を見て、石炭を肌で感じたに違いない。

この感覚は後年筑豊の炭鉱に勤務することになって身につけて行つたが、私が生まれ育つた現在の韓国釜山では全く視野の外であつた。石炭というものに接し、意識しはじめたのは、物心分別のつきはじめた小学校のころからであらうか。釜山というところは、九州、中国地方とくらべて冬期は割合に寒気の厳しいところで、室内の暖房に石炭ストーブを使用しており、石炭の投入、そして灰の処理が我が家の子供の仕事であつた。石炭のくすぶる鼻をつく異臭（後年坑内勤務で、石炭の自然発火の発見に役立つとは思ひもよらないことであつたが……）、勢いよく燃える火の炎、暖かい部屋、一家は火鉢とともに、寒い夜は集つて団らんの一時を過した。段々成長するに従つて、乗物としての汽車、蒸気機関車の煙、汽船の煙、小・中学校における理科の授業による石炭の知識。母親が使用する煉炭が石炭からつくられていることも知る由もなかつた幼い頃……。

これらの事柄は、昭和の初期頃までに生れ育つた人々にとって、エネルギーが石炭に依存していた時代では共通の認識だつたに違いない。

三、学窓時代

本格的に石炭とかかわりができ始めたのは第二次世界大戦の戦局も敗

色の濃い昭和十九年秋の大学の採鉱学科に入学してからである。ここでマイニングエンジニアとしての学問を体系的に学ぶこととなつて、逐次石炭の採掘技術も身につけていった。私の学んだ大学は福岡の地にあり、教授陣も石炭の権威者が多く、必然的に金属鉱山より石炭産業への指向性が身につくこととなつたわけである。

加えて、当時全国の石炭産出量の四十％を生産していた筑豊炭田の存在、そして当時の我が国の三大工業地帯としての北九州の製鉄産業を支えていた数百の炭鉱群は、当初見るも珍しいものとして感じていたが、専門の知識を段々と身につけはじめてから逐次身近なものとして感じられるようになって来た。

昭和十九年の十月に入学した大学―戦時中の特例で、高校の半年繰上げ卒業が昭和十六年から実施されたため秋の入学となつた―の採鉱学科では山田教授（後の学長として活躍）はアメリカ軍B29の空襲下においても、黙々として採鉱学の講義を続けられた。而も戦時統制中において敵国語としての英語のテキストによる授業である。学問として国境を超えた真摯な真理探求の姿勢は深く感銘を受けた。これが敗戦後外国の技術導入による炭鉱機械化の原動力となつたものと後年感じたことである。炭鉱との直接のかかわりは以外にも早く訪れた。昭和十九年の終りから、昭和二十年のはじめにかけて、我が国の敗色は益々強くなり、既に文科系の学生は学徒動員されて戦場の第一線にあり、理科系は各工場に動員されていた。我が採鉱学科の二年生、三年生の学生は各炭鉱にて石炭増産に挺身していた。我々一年生は早速、その慰問を兼ねて炭鉱見学が数班に分けて行われた。

私は佐賀県の杵島炭鉱、飯塚市の日鉄二瀬炭鉱の坑内に初めて入り、地底の石炭層に直面した。それは予想を超えた未知の世界であり地底深く数百米に賦存する石炭の素顔であった。私はその石炭層に手をやり、その塊を手のひらにのせた。ぞくぞくするような、何とも言えない感情の高まりが背すじを駆け抜けた。丁度吉野ヶ里の発掘担当者がその遺跡を掘りあてたような興奮を感じた。これが数千万年前の植物の現世における姿なのか。

石炭層は切羽のどこまでも続いているのか帽子につけたキャップランプがその先を照すのみである。杵島炭鉱では当時禁止されていた女子の坑内労働が、戦争の人手不足により女子挺身隊として認められ、男子の採炭夫と一緒に働いていた。坑内は湿気が多く、湿度が高いため、上半身殆んど半裸体であり、プーンと厚化粧の白粉いの匂いが鼻をついた。

キャップランプに照らされる女子の姿はなまめかしい―後年の山本作兵衛氏の炭鉱画そっくりであった。

二瀬炭鉱の立坑、杵島炭鉱の長い斜坑人車から降りて地下数百米の地底におり立ったときの気持、ヒンヤリとした冷氣、天井からポタポタと落ちる雫。機械通気のため流れ動く何やらカビ臭い空気の匂い。鐘乳洞や汽車のトンネルに入った時と全く異なる地底の状況である。

学校の講義でいくら採鉱学を学んでも全く理解し得ない石炭とのかかわりであった。

ああこれで、マイニングエンジニアとしての道を歩むのかなあという実感。それは生れて二十才になるまで全く感じ得なかった未知の世界であった。そしてこれは他の工学と全く異なる別世界の感覚でもあった。

この体験によって、級友のなかの数名は性格にあわないと他の方面に転進して行った。

先輩の方々は歓待してくれた。鉱山一家というか、自分達の跡をついでくれる後輩達、石炭採掘に伴うきびしい条件を克服するための技術者の卵は、我が子と同じように愛しいものなのか。後年炭鉱に長年勤務するようになって、初めて先輩達の心根が理解できたのである。

このときから私達は、授業の合間を見てよく近くの炭鉱の見学に出かけた。戦いは益々我が国に利あらず、食糧不足が国民の戦意にも影響しはじめた頃、先輩たちの好意にすぎたのか、早く石炭技術者としての体験を積みたかったのか、その両方の気持からであったのであろう。

福岡の大空襲で街の半分は戦火に焼かれた。学校の講義は途絶え勝ちであった。どういうわけか敗戦の昭和二十年八月十五日は、植木町にある三菱新入炭礦におり、天皇のラジオ放送を聞いた。当時筑豊本線から直方駅に入る前の植木町の遠賀川左岸にそそり立つ新入炭礦の硬山は、自然発火により炎と煙を出しており、空襲時に標的にされるおそれがあるとして、消火に懸命であった。しかしその硬山は今はずっかり道路工事用シャモットとして採掘しつくされて、姿を消してしまっている。

敗戦後、昭和二十二年九月までの二年間は戦後の我が国の虚脱、食糧難、戦地からの兵士の帰還、外地（朝鮮、台湾、満州、樺太）からの引揚者、アメリカ軍の進駐など従来の価値判断が大きく変化した激動の時代であった。

しかし日本国民は勤勉である。敗戦の中に祖国の復興を目指して、国が掲げた最初のそして最大の目標は石炭と鉄の増産、次に食糧の増産で

あった。我々採鉱学科学生は、水を得た魚のように、マイニングエンジニアを目標に勉学にそして、炭鉱における二年次の一ヶ月余の実習、三年次の炭鉱・鉱山の開発・採掘計画など卒業論文を手がけ、実社会に巣立ちした。級友二十六名中殆んどクラスのメイトが国家の要請を受け、石炭増産に対応すべく、胸を張って敗戦後の混乱時期における復興の原動力としての石炭産業に身を投じたのであった。

四、石炭産業の復興時代

昭和二十二年九月学校を卒業すると古河鉱業株式会社に入社した。直ちに石炭部門に配置され、筑豊炭田の奥地にある田川郡川崎町にある大峰鉱業所の大峰炭鉱の坑内係として石炭生産の第一線に配属され、いよいよ石炭との長い半生のかかわりに入ることとなった。入社当時当鉱は古河の石炭部門の主力鉱として、鉱業所全体で月産五万屯のうち当鉱で三万屯を生産し、優良な田川三尺層を有し、戦後の後遺症も漸く癒え、国の石炭増産の要請に答えるべく、意気の上っているところであった。

学生時代に炭鉱の坑内見学し、多少坑内係員の仕事は分った積りでも、実際自分でやってみると中々困難が伴うものである。しかし半年、一年とやっているうちに段々と要領のみ込んで、石炭採掘に意欲を燃やした。

採炭切羽で火薬による発破作業で小割にされた石炭をショベルでコンベヤーに流し込んで炭車に積み込む。コンベヤーを流れている石炭はキラキラ光り、それをじっと見つめているとき自分も採炭技術者のはしくれになった誇りが湧いて来るのであった。

毎日々々石炭を眺めていると本当に愛着が生れるものである。手でさわわり、眼でたしかめ五感を働かして肌で感じている内に、その色つや、硬のまじり具合などで、良質の石炭の有無、カローリなど直観的に判断できるようになり、更に石炭に対する愛着が深まって行った。そして駆け出しのエンジニアは段々と技術を磨いてゆき、五年程度すると、漸く一人前の係員として成長してゆくのである。

そして石炭を市場に出すためには、石炭層を採掘する準備のための掘進作業、坑道や切羽を保持するための保坑作業、採炭の機械を管理する係、ガスの排除や自然発火防止のための保安係など一通りの作業経験を積み、更にその計画をすすめる測量、企画の仕事を逐次手がけると共に運搬、機械、電気、選炭その他総合的な知識を積み重ね、安全の確認とともに生産性の向上を図るマイニングエンジニアとしての仕事を身につけるには十年以上の歳月を必要とした。

勤務先の大峰鉱は、石炭埋蔵量からして、百二十年は存続可能と言われ、石炭とのかかわりを持ったはじめの十年間は最も充実した時代であった。昭和二十年から昭和三十年前半は筑豊炭田の最盛期であり、日本の復興を支えて、全国の工業地帯の工場に向って、蒸気機関車にひかれた石炭列車は、日夜を分たず走りつづけ、我が国の石炭生産は遂に年産額五千五百万屯の大台の記録を示し、我が青春の最も華やかな時代でもあった。

五、石炭産業の激動から衰退時期

昭和二十七年、八年頃から始まったエネルギー革命としての外国からの

石油の輸入、加えての安価な外国炭の輸入攻勢は昭和三十年代に入り、急速に劣悪な自然条件にある我が国の坑内掘りを主体として操業を続けて来た炭鉱にとって敗退を余儀なくされた。特に明治時代から採掘を続けてきた筑豊地区の炭鉱はその波をもろにかぶった。有望鉱として九州で五指の指に加えられていた勤務先の大峰鉱も、採掘深度が地下七百五十米を超え自然条件が悪化した。

若返りを図るための立坑の掘さく、浅所の採掘区域への展開、採炭の大幅な機械化など各炭鉱は生き残りに必死の努力をした。合理化が進むにつれて各炭鉱とも労働組合との紛争がくり返され、昭和三十三年の三池斗争以降、国の石炭政策の転換に伴って逐次閉山に追い込まれ、昭和三十年後半から昭和四十年前半にかけて、筑豊地区の名門炭鉱は次々に姿を消して行った。

そして、筑豊には失業者が溢れ、大きな社会問題と化して行った。一方我が国の経済は昭和三十年来、戦後は終ったとして高度成長の時代に入り、石炭などの素材産業から機械、電気などの第二次産業に比重を移して行った。

勤務していた大峰鉱は昭和三十七年閉山して、事業を縮小して第二会社として操業が続けたが、昭和四十四年にその歴史は終った。

私も昭和三十七年北海道の同系の雨竜炭鉱に数年勤務したが、之も数年も続かず、再び昭和四十一年頃九州の同系の目尾炭鉱などに勤務したが、これも長く続かなかつた。

この十年間は、石炭合理化の明け暮れであった。高度成長に入った我が国経済のなかで、炭鉱マンの苦斗は、続いたのである。「出るも地獄残るも地獄」と言われた炭鉱勤務者は坑内外、技術、事務系を問わず苦

難にあえいだ。特に坑内採掘夫にとってはその技術は地上の他の業種に通用しない宿命にあり、今回の北炭幌内炭鉱の閉山においても繰り返され、往時を思い胸の痛みを覚えるのみである。閉山から閉山にあけくれたこの十年間は、自分の人生にとって何であつたらうかと今更ほろ苦く思い出すのみである。石炭との深情け、かかわりの深さに、人々はその絆をたち切れずにどんなに家族と共に悩み苦しんだのであろうか。

当時の石炭産業の戦士達は、既に高齢化し、この筑豊の各地で肩を寄せ合って生きているのを忘れ得ないのである。

六、石炭産業の残務処理

一般の工場では操業を停止すればそれで一応施設の処理や従業員の再就職などで終了するであろう。しかし炭鉱では北海道の無人の山地や西九州の海底炭鉱を除き、特に人家の多い筑豊地区では、石炭の採掘に伴う地表の沈下によって被害を受けた家屋、農地、溜池、道路、鉄道などの復旧が国の法律で義務付けられ、鉱害復旧事業として特に資力のある大手系の企業では有資力炭鉱―中小炭鉱は資力が無いので無資力炭鉱として、国の機関で復旧がなされている―と言われ、一部の補助金を受けて、各企業で復旧工事が平成四年までの時限立法で進められているが期限内では終わらないとされている。

マイニングエンジニアとしては採掘による鉱害防止法は学問として一応習得してはいるものの、地表の沈下を喰い止めることは出来ない。一方筑豊地区では明治時代から長年掘り続けられ、地下は坑道の網の目となっている。そのため採掘しているところといないところに地表の変

化を起し、家庭が傾いたり雨水が溜ったりして被害を起しているわけである。石炭採掘はその最終の鉱害復旧完了までを考えて行うべきであろうが、復旧費の内部積立は長い時代に貨幣価値の変動でどうしてもペイしないこととなり、加えて復旧に対する被害者の心情にも支配されることもあり非常に困難な仕事である。

私はこの仕事を十年余行つたが、石炭採掘の技術者から、被害補償の地味な仕事の対人関係の機微にふれる仕事に戸惑いを感じ、また土木、建築、法律などの異なつた知識をまた習得せざるを得ないことでもあつた。

一体石炭生産とは何であつたのだろうか。明治時代から国家百年の近代化に大きく寄与し、戦時中、戦後は国の戦い、そしてその復興のためのエネルギー供給の重責を担つた炭鉱は、閉山によつて人々に再就職の道を歩ませ、また残務の鉱害処理に担はされれば、今度は、石炭産業は悪い者扱いとなつてしまふ。被害者・加害者の関係、石炭の後遺症である。

この十年の業務はまた何とやるせない、一体自分の人生は何であつたのかをしみじみと感じさせられた期間でもあつた。しかし誰かがやらねばならぬだろう。それは石炭採掘に従事した者が結局は引受けてやることもかも知れない。努力してやつた仕事が報われない世界、それは経験した者しか分らない。全く立場の異なつた、結果として双方満足しない、何だか人間性のはずれ勝ちな仕事、是も国のエネルギー政策が政治によつて翻弄されたことも一因とも思われるのである。

七、むすび

わが石炭とのかかわりは、無意識に石炭を扱つた幼い時代を別として、実際に石炭産業にたづさわつてから三十年余、はじめの十年は戦後の復興昭和二十二年から昭和三十年前半の最も充実した時期であり、次の十年は昭和四十年前半までの石炭合理化、縮小、閉山への激動から衰退の苦悩の時期となり、最後の五十年半ばまでの十年余は、閉山後の残務処理の全く実りのないと感じた傍観の時期でもあつた、

今、石炭との直接のかかわりから離れて十年となる。しかしわが人生の半ばを過した石炭とのかかわりは、無意識の内にも良きにつけ悪しにつけ、我が血肉の一部となつて離れ難く、遂にかつての筑豊炭田の中心地飯塚の地に永住の住居を求め、朝な夕なに筑豊富士とうたわれる名門忠限炭鉱の硬山を眺め、現勤務先の折尾の地まで筑豊本線にて、遠賀川を渡り、また横に眺め、かつての川ひらたの往来した折尾の掘川を望みながら、筑豊炭鉱遺跡研究会として、未だに石炭とのかかわりを持つとする石炭の魅力は何であらうか。

それは、わが半生において石炭と苦楽を友にした同志、坑内で尊い命を石炭生産に殉じた亡き友への鎮魂の心であり、この第二の産業革命といわれる情報化、ハイテクノロジー化の時代へと世界の経済大国の道を歩みはじめた我が国の繁栄の基礎を我々石炭産業に従事した者が、すこしでも貢献したのではないかと言うちよっぴりとした自負心が心の底にあるからに他ならないと思うものである。

それが故に、日本の近代化に果たした石炭産業百年の歴史を築きあげた明治、大正、昭和の各世代の石炭にかかわりのあつた人々と共に、後世に何等かの形として残すべく、この拙文が石炭産業にたづさわつた人々の労苦を知る一助ともなれば幸いである。